

国際シンポジウム

「Everyone a Changemaker」

— 世界を変える社会イノベーション —

2010年2月6日(土)13:00より、東工大蔵前会館「くらまえホール」にて、国際シンポジウム「Everyone a Changemaker—世界を変える社会イノベーション」が開催されました。国際的社会起業家養成プログラムの3年間の事業の集大成でもある今回の国際シンポジウムには、「社会起業家の父」と呼ばれ、社会起業家と社会イノベーションの領域では知らない人のいない、Ashoka: Innovators for the Public 創設者・代表の Bill Drayton 氏を基調講演者として、また、世界の社会起業家の活動と社会起業家による問題解決のムーブメントをいち早く日本に紹介した書籍『チェンジメーカー』の著者で写真家の渡邊奈々氏と、世界を代表する社会起業家のひとり、Project Impact の代表で Ashoka Fellow でもある David Green 氏を講演者として招聘しました。

(講師プロフィールは当日配布プログラムをご参照ください)

Bill Drayton 氏が来日し、一般向けに講演の機会を持つということは初めてのことであり、定員 300 名を予定して参加者募集を開始したところ、定員をはるかに超える参加希望が殺到し、募集開始からわずか 1 日半で参加希望の受け付けは打ち切られました。申込はシンポジウム当日の早朝まで間断なく舞い込み続けました。会場定員を 100 名近く超過して参加希望を受け付けましたが、それでも来場をお断りせざるを得ない人数が当日まで膨れ上がり続けたため、急遽、本学社会工学専攻の大学院生の技術協力を得て、シンポジウムの Web 中継を実施することとし、来場をお断りした方々には開催前夜に中継 URL の通知を行いました。

当日の、シンポジウム会場に来場した参加者は全部で 367 名でした。内訳は、全体の 4 割弱が「民間企業」関係者、続いて財団法人、独立行政法人、国内外の NPO・NGO など各種団体関係者と個人が含まれる「その他」および「学生」が全体の約 4 分の 1 ずつ、残る 1 割強のうち半数は無回答でしたが、あとは教育関係者、官公庁・自治体関係者、研究機関等の研究者、の順に参加者が多く見られました。

演台の袖から Bill Drayton 氏が会場入りすると、「本物だ！」というような何ともいえない無言の興奮が場内を駆け巡りました。本シンポジウムの主催の国際的社会起業家養成プログラム事務局から、井上和雄ディレクターが Web 中継と Twitter での議論参加の方法について説明を行ったのち、満席の状態ですべての参加者が開会しました。

最初に、主催者である東京工業大学大学院・国際的社会起業家養成プログラムの渡辺孝特任教授、社会工学専攻の専攻長である中井検裕教授、東京工業大学副学長の牟田博光教授の3名から、開会の挨拶がありました。



本シンポジウム最初のプログラムは、日本における社会起業家の活動の認知度を一気に高める起爆剤となった書籍『チェンジメーカー』の著者で写真家の渡邊奈々氏による講演「ソーシャル・アントレプレナーという生き方」でした。30分間という短い講演時間ではありましたが、静かな語り口とは対照的に、鋭く核心をつく言葉の数々は、聴衆の一人ひとりに鮮烈な印象を残し、シンポジウム終了後のアンケート調査でも、深く胸に突き刺さる素晴らしい講演だったというメッセージが数多く寄せられました。



次に、社会起業家支援組織 Ashoka: Innovators for the Public の創設者・代表の Bill Drayton 氏に、「How Will You Do in an Everyone a Changemaker World?」と題して基調講演を行っていただきました。日本で初めて、生の声で聴衆に語りかけられた Drayton 氏の 45 分間のスピーチを、ひと言たりとも聴きもらすまいと、満員の会場は水を打ったように静まり返りました。



続いて、前半最後のプログラムは、Project Impact の代表であり、渡邊奈々氏の著書『チェンジメーカー』でもその活動が紹介された Ashoka Fellow のひとり、David Green 氏に、「Humanizing Capitalism」と題して講演していただき、Green 氏の最新の活動の数々が紹介されました。



予定されていた 20 分をオーバーしても語りつくせないだけの活動を展開されており、Green 氏も聴衆も、与えられた講演時間の終了を惜しみつつ、シンポジウム前半の第 1 部を終了しました。

15 分ほどの休憩をはさんで、シンポジウムはパネルディスカッション「社会起業家を養成する社会のシステムづくり」で再開されました。モデレーターを務めた渡辺 孝特任教授が事前に用意した質問を 3 名のパネリストにぶつける形で議論が進められました。



事前質問に基づく議論がひと通り終了すると、引き続いて、「Q&Aセッション」が行われました。本シンポジウムでは、会場の混乱を避けるため、来場した参加者にあらかじめ質問票を配布し、質問希望者に記入・提出してもらう方式をとりました。休憩時間に回収された質問票のなかから、渡辺 孝特任教授が任意に選んだ質問を、質問票を書いた本人に発言してもらうというやり方でしたが、質問票を出したご本人が中途退席していたり、どんな質問を書いたか記憶していなかったり、といったハプニングもありました。



錚々たる顔ぶれのスピーカーを招聘し、午後 1 時から午後 5 時まで 4 時間予定されていたシンポジウムの開催時間は、瞬く間に過ぎました。閉会后、3 名のゲストスピーカーとの会話を求めて多くの参加者が会場に残り、どのスピーカーの周りも黒山の人だかりとなりました。関心事や志を同じくする参加者同士の交流の場を求める声も、Twitter やアンケート調査の回答のなかにいくつも見受けられました。

また、このような国際シンポジウムや、第一線で活躍する社会起業家を講師に招いて行われる公開講座など、社会起業家・社会イノベーション研究と社会起業家育成教育の分野できわめてニーズの高い有意義なイベントを 3 年間にわたり開催してきた社会工学専攻の「国際的社会起業家養成プログラム」が、今年度末をもって活動を終了せねばならないことを惜しむ声も数多く事務局に寄せられました。

渡邊奈々氏、Bill Drayton 氏、David Green 氏という、まれにみる得がたい講師陣を迎えることができた本シンポジウムは、今後の社会起業家・社会イノベーション研究と社会起業家育成教育の指針として関係者が共有すべき知見を得ることのできた、大変に貴重な機会でありました。「国際的社会起業家養成プログラム」の事業は今年度で終了しますが、これまでのイベント参加者のなかから、今後の自主事業として展開していく本事業への協力者も生まれており、彼らとの連携と通じて、今後の社会起業家育成教育に反映してまいります。本シンポジウムでの各ゲストスピーカーの講演とパネルディスカッションの内容は、「国際シンポジウム 2010『Everyone a Changemaker—世界を変える社会イノベーション—』講演録」として冊子化し、「国際的社会起業家養成プログラム」公式ウェブサイト (<http://www.soc.titech.ac.jp/~soc-entre/>) より広く公開される予定です。(日本語版のみ)

以上

(文責；露木真也子)